四・一二クーデター前後における第三期創造社同人の動向

——留日学生運動とのかかわりから——

小谷一郎

はじめに

本稿で、所謂第三期創造社の同人、李初梨・馮乃超等の日本留学時代、とりわけ、四・一二クーデター前後の動向をみてみたいと思ったのは次のような理由からである。

それは、第一に、彼ら第三期創造社同人の日本留学時代の足跡を明らかにすることによって、彼らと日本近代文学、さらには創造社の「左旋回」をめぐる問題などにある視座を得たいと思ったからである。

周知のように、彼らが一九二八年に提唱した「革命文学論」は、その階級還元論的な性格などから、これまでにも、彼らの日本留学時代一世を風靡していた「福本イズム」との関連が指摘されている。(注1) しかしながら、その具体的・実証的な研究という点では、これまでほとんど手つかずの状態であったといっていい。彼らの日本留学時代の足跡を出来る限り明らかにしてみることは、彼らがどこで、どのようにして彼らの「革命文学論」を組み立てていったのか、その道筋を明らかにすることに繋がり、ひいては、そこにおける日本の近代文学及び、プロレタリア文学の影響が如何なるものであったのかを具体的に検証していくひとつの手掛りとなり得ると思われる。そして、また彼らのそうした「左旋回」の軌跡が明らかになることは、とりも直さず、彼らをも含めた創造社の「左旋回」をめぐる問題のいくつかに対し、内側からある光を投げかけてくれるだろう。

また、その第二は、彼らの日本留学時代の足跡、とりわけ、四・一二クーデター前後における彼らの動向を明らかにすることによって、その後の「一九三〇年代」における日本と中国の無産階級文学運動の関係を捉える何らかの糸

口が得られるのではないかと考えたからである。

いうまでもなく、彼らは日本留学生であり、四・一二クーデターに始まる国民革命の挫折という事態も日本において体験した。身を革命の現場近くに置いていなかったという点であるいは、彼らの受けとめ方は中国国内にいた他の創造社同人たちと若干質を異にするのかも知れない。しかしながら、国民革命の挫折という事態は、それが中国国内で多くの混乱を巻き起こしたと同様に、彼ら日本留学生の間にもある混乱と動揺とを引き起こしていったに違いない。より具体的にいえば、これまでにも指摘されているように[注2]、第三期創造社が「革命文学論」を提唱することと、国民革命が挫折したという現実とはやはり分かち難く結びついているのである。とすれば、彼らがそこで提唱した「革命文学論」が中国の無産階級文学運動史上、ひとつの時代を劃するものであったと同様に、彼らをも含めた日本留学生間の動きもそこである変容をみせ、彼らを通じて結ばれていく日中の無産階級文学運動との関係の上でも、そこにひとつの時代を劃してさしつかえないのではないかと思われる。この意味でいえば、彼ら第三期創造社同人の日本での足跡、とりわけ、四・一二クーデター前後の彼らの動向はより直接的なかたちで「三十年代」の日中無産階級文学運動の関係と関わる事柄であり、その後の交流を具体的に検討していくひとつの糸口となり得るように思われる。

本稿は、とまれ、こうした私なりの思いに基づいて、第三期創造社の日本留学時代の足跡を、四・一二クーデター前後の彼らの動きに焦点をあてて捉えてみようとしたものである。

なお、あらかじめ断っておくが、ここでいう第三期創造社同人とはあくまで日本留学生だったものを対象としており、郭沫若が紹介したという李一氓・陽翰笙などには触れていない。第三期創造社同人のうち日本留学生だったのは、その主力であった李初梨・馮乃超・朱鏡我・彭康・李鉄声、さらには、馮乃超が彼らの後「陸続として帰国してきた」という、王学文・傅克興・沈起予・許幸之・沈葉沉などである。

（一）

すでに他の所で述べたことではあるが、第三期創造社の主力である李初梨等五名についていえば、彼らは大学の志望学科からみて、全てが文学部の哲学科、乃至は社会学科に学んでいたことが特徴的である[注3]。なかでも、李初梨・馮乃超・彭康・李鉄声の四名はすべて京都帝大文学部哲学科に学んでいた。したがって、彼らをめぐる人的な繋がりも

ここを起点にかなりの程度まで整理し得る。私はまず、こうした彼らの人的な繋がりを、彼らと他の創造社同人とを結ぶいわば「パイプ役」の役目を果した鄭伯奇との繋がりから見ていくことにしたい。

鄭伯奇、陝西省長安の人である。彼は第一期から第三期に至るまで創造社の中で常に「中堅」の位置を占め、さらに後に述べるような李初梨等との関係を背景として彼らが帰国する直接の因となった成仿吾の渡日を促す仲介の役を果した。鄭伯奇は一九一七年、日本に留学[注4]、一高特設預科、第三高等学校を経て、一九二一年に京都帝大文学部哲学科に入学した[注5]。専攻は心理学。彼は一九二五年、卒業論文「学童の色彩感情について」を書いて卒業しているから[注6]、李初梨等が入学した時にはまだ学部に在学していたことになる。

時は一九二四年。この年、京都帝大文学部哲学科には李初梨、馮乃超、彭康の三名がそろって入学した[注7]。

当時の京都帝大文学部哲学科は教授に西田幾多郎、朝永三十郎、助教授には田辺元、天野貞祐等を擁し、文字通り「日本観念論哲学の最高の牙城」であった。そして、そこには当時流行していた「新カント主義」「新理想主義」などに共鳴し、「より現実的な志向から倫理学、さらに社会学を志す。哲学に基礎をおくかぎり京都大学に赴いて、西田・田辺先生らにまず学ばねばならぬ」と考える若き学徒が参集していたのである[注8]。おそらく、李初梨等もこうした雰囲気の中で京都帝大文学部哲学科に進んだのであろう。

李初梨は、はじめ蔵前の高等工業に学んでいたが、周作人、ツルゲーネフなどの文学を愛好し、後に退学して文科に転じ、熊本の五高に進んだ[注9]。馮乃超は原籍が広東省南海県、早くから日本に留学し、大同小学校、成城中学を経て、名古屋の八高に学んだ[注10]。彭康は原名が彭堅、京都の三高の出身であった[注11]。

鄭伯奇の回想によれば、彼らと鄭伯奇とは「ほとんど朝から晩まで一緒」だったほど親しかったという[注12]。なかでも、鄭伯奇・李初梨の関係は少し特殊で、彼らはともに「五・四」期を代表する文化的啓蒙団体少年中国学会の会員であった。しかも、彼らはすでに一九二〇年二月、鄭伯奇が同じ学会会員である田漢を訪ねて上京した際、田漢が二人を引きあわせていて、いわば旧知の間柄だったのである[注13]。

そして、あくる一九二五年、この京都帝大文学部哲学科には李鉄声が入学した[注14]。李鉄声は原籍が湖北省潜江県[注15]、原名を李声華という[注16]。一家に著名な人が多く、父が孫文の大

総統秘書官を務めたことのある元勲李書城、[注17] 叔父が中国共産党第一回全国代表大会上海代表の李漢俊である。[注18]

さて、李鉄声が入学した同じ一九二五年、李初梨は文学部哲学科から文学科に転科し、[注19] 馮乃超は東京帝大文学部社会学科に転入学した。[注19] また、鄭伯奇はこの年、哲学科を卒業、[注20] 同帝大経済学部の聴講生になった。[注21] そして、このことがさらに彼らの人的な輪を広げていく。

まず、東京帝大文学部社会学科に転入学した馮乃超はそこで朱鏡我と再会した。朱鏡我は原名を朱得安といい、[注22] 第八高等学校の出身。そして、二人は、文科、理科の違いはあっても第八高等学校を一九二四年に卒業、つまり同期生であった。[注23]

また、鄭伯奇が聴講生になった経済学部には同じ第三期創造社の王学文がいた。[注24]

王学文が学び、鄭伯奇が聴講生になったのは、いうまでもなく、そこに進歩的な学生間に圧倒的な人気を博していた経済学者河上肇がいたからである。なかでも、王学文は、学部・大学院を通じて一貫して河上肇の指導をうけ、彼の研究室にも出入りして、そこで『社会問題研究』などを閲読していたという。[注25]

王学文は、江蘇省徐州市の生れで原名を王守椿という。一九一〇年に日本に留学し、第四高等学校に学び、一九二一年、つまり鄭伯奇と同期で京都帝大経済学部に入学した。そして彼は、鄭伯奇が聴講生になったこの年、学部を卒業して大学院に進学している。[注26]

このように、第三期創造社の同人は主力の五名を含めて京都帝大文学部哲学科を起点にひとつの人的な繋がりをもっていたのである。[注27] そして、このことに関わっていえば、彼らは所謂「大高同学」の関係にあり、しかもほとんどが同級であって、世代的にみても極めて近いという特徴をもっている。いうならば、それだけ彼らは「日本体験」を互いに共有しうる素地をもっており、またそれだけ互いにある共通した雰囲気なり傾向なりをもっていたのではないかと考えられる。

（二）

ところで、李初梨等、第三期創造社の主力が京都帝大に入学した一九二四年、二五年という年は、日本の社会運動及び学生運動がある「転換」を迎えようとしていたときであった。それは、例えば「学連事件」に連坐した清水平九郎氏の言葉を借りれば、「わが国の社会運動史上、真の左翼的主体が、激しい内部抗争を経ながら形成された、文字どおり嵐の激動期でした」[注28] といわれるときである。

主だった事柄だけを列挙してみても、二四年三月、日本共産党が解党、九月に福本和夫が帰国した。また、二四年後半から内部対立が顕在化してきた日本労働総同盟は、二五年五月に分裂し、さらに、この年、普通選挙法と抱き合わせで治安維持法が公布された。そして、当時の日本の学生運動は、これら日本国内の情況をより鋭く反映して、学生連合会の名称を学生社会科学研究会と改め、ついに、一九二五年七月には「学生運動を無産階級運動の一翼と規定する」までに「一大躍進」をとげていたのである。(注29)

李初梨等、第三期創造社の人々はまさにこうしたとき、その大学生活を送っていたのである。彼らの中で学生社会科学研究会（以下特別の場合を除いて社研と略称）と関係をもっていたのは王学文である。王学文は学部を卒業する前、つまり、一九二五年の初め頃、京大社研に加入した。王学文は回想「河上肇先生に師事して」の中でこう書いている。

私はまだ党の組織に参加していなかったが、先生の影響でマルクス主義を信じていたので彼らの研究活動に参加した。

王学文は京大社研のメンバーの中で、岩田義道、石田英一郎、大田遼一郎、常見（仮名であるという、逸見重雄のことか？）等と親しかったという。なかでも、天津に家を持ち旅順中学の出身でもあった大田遼一郎とは特に親しくつきあったらしい。また、回想によれば、「当時、たえず中国人留学生と連絡をとっていた」のが常見であったという。(注30)

所謂「学連事件」は、王学文が社研に参加したこの年の末に起った。それは、既述したように学生運動の質的転換をはかった学連第二回全国大会（於京都帝大）が引き金になって、治安維持法による初の犠牲者を出したという点で極めてセンセーショナルな事件であった。この時、検挙、起訴された学生は全部で三八名、その中には王学文と親しかった岩田義道等が、さらには、鄭伯奇と哲学科心理学専攻の数少ない同級生の一人であった淡徳三郎なども入っていた。(注31) おそらく、王学文・鄭伯奇だけに限るまい。時流に極めて敏感な李初梨にとっても、この事件はかなり身近な「日本体験」としてあったに違いない。

菊川忠雄氏の『学生社会運動史』によれば、「学連事件」後、新たな時期をむかえた学生運動は「支配階級の社会科学運動暴圧に抗争する闘争によって彩られ」、「この闘争は、大正一五年後半期から昭和二年にわたって最も果敢に戦はれ、昭和三年三月一五日の日本共産党検挙事件前後に

於て頂点に達した」という。そして、氏がその闘争が最も果敢に戦われた時期を、別に「理論闘争」期と呼んでいることからもわかるように、一九二六年、二七年とは、所謂「福本イズム」が一世を風靡していた時期であった。[注32] もはや、いうまでもないかも知れないが、周知のようにこの時、先の学生社研は「福本イズム」のメッカ的な存在だったのである。

馮乃超の「我的文芸生活」（〈大衆文芸〉第二巻第五・六期合刊　一九三〇年六月）の記載は、おそらくこうした時期と対応するのであろう。馮乃超はそこに次のように記している。

国民革命――上海暴動――日本労農党の対支非干渉同盟――福本和夫（日本共産党中央委員）日本プロレタリア芸術連盟――大学内の社会科学研究会――マルクス・レーニン主義

馮乃超の記述が、時間的に整理されたものかどうかは判然としない。だが、若干の補足をしてみるならば、日本プロレタリア文芸連盟がその名称を日本プロレタリア芸術連盟と改めたのは一九二六年一一月のことである。そして、その頃、「プロ芸」の中核に入っていたのが「大学内の社会科学研究会」、すなわち帝大新人会の外郭団体で、「福本イズム」に導かれたマルクス主義芸術研究会のメンバーであった。

おそらく、李初梨等第三期創造社の人々はこうした当時の学生社会科学研究会との接触をはじめとする彼らの「日本体験」をもとに自らの「革命文学論」を組み立てていったのであろう。そして、彼らの「革命文学論」それ自体についていえば、それは一九二七年の二月から四月の時点である枠組みがすでに出来上がっていたらしい。

経済学部の聴講生であった鄭伯奇は、一九二六年の夏、広州中山大学の文学院院長に招聘された郭沫若の招きを受けて帰国した。彼はしばらく広州中山大学、黄埔軍官学校等の教官を務めていたが、あくる一九二七年二月再び来日した。[注33] その目的は「未修了の手続きを済ませる」[34] ためであったという。

鄭伯奇の回想「創造社後期的革命文学運動」によれば、京都にいた李初梨はこの時「大革命の真相を了解」すべく鄭伯奇を頻繁に訪ねてきたという。そして、回想にはこの後次のように記されている。

彼らは特に創造社に関心を抱き、創造社が方向を転換して、無産階級革命文学を提唱するよう希望した。私はマルクス・レーニン主義と無産階級文学とに理解が深い

というわけではなかったが、いくらか影響を受けていたので同意を示した。私たちはこのため何度か小さな会を開いた。朱鏡我も特別に東京から参加した。[注35]

鄭伯奇は、このように彼らの「方向転換」論、「無産階級革命文学」論に同意を示し、その意向を伝えて「沫若、仿吾、達夫と具体的なやり方を相談」すべく帰国の途についた。

四・一二クーデターが勃発したのは、まさしく彼がこの帰国途上にあった時のことである。

（三）

四・一二クーデターの勃発、乃至は国民革命の挫折が引き起した情況について、馮乃超は、「広範な知識分子階層が大革命の失敗後反共と擁共との間でより明確な選択と態度表明とを余儀なくされた」[注36]と記している。いうまでもなく、こうした情況は日本留学生の間でも同様に生じていたであろう。それは、馮乃起のいうような「反共か」「擁共か」という鋭い二者択一を迫るものであったかどうかは別としても、ときにそうした受けとめを可能にするほどの「衝撃」を与えながら彼ら留学生間にある「分化」を引き起していったように思われる。

例えば、王学文はこう記している。

私は、一九二七年〃四・一二〃クーデターの後、日本の京都で中国共産主義青年団に加入した。紹介者は于昌然同志で、私といっしょに加入したのは廖体仁同志、劉伯剛同志である。私は同じ月に帰国して上海に行き、五月末に武漢に行って、六月に中国共産党員に転じた。[注37]

全く事実だけの記述でしかないのだが、それでもこの短い間におけるめまぐるしい動きそのものの中に、王学文が受けたであろう衝撃の深さが見てとれよう。

王学文は、この時、「今後何かあったら知らせてくれるように」という大田遼一郎等の連絡先を手に帰国した。彼が武漢を目指したのは、葉挺の部隊に参加するためである。だが、申し込みが遅れたためそれは果せなかった。七月、白色テロの横行する武漢を避けて再び来日。この時、彼は、常見と他の一人に誘われある労働者の劇団に行って「武漢の汪精衛が革命を裏切ったことと国民党と共産党の合作の決裂について」話をしている。王学文が再度帰国したのはおそらく八月の末頃、南昌起義に続いて、賀竜・朱徳等が汕頭を占領したというニュースに接したからであった。[注38]

ところで、王学文の先の回想は、当時の日本留学生間に中国共産主義青年団の組織があったことを示すはじめての

資料として注目に値する。于昌然・劉伯剛の二人についてはいまのところ不明である。[注39] 廖体仁は第八高等学校理科甲類の出身で馮乃超と同級、つまりは、李初梨等とも同期で、一九二四年京都帝大経済学部に入学、[注40] 王学文からみれば三年後輩に当る人物である。

さて、王学文が最初に帰国したのとほぼ同じ頃、夏衍もまた帰国した。夏衍は回想「憶阿英同志」の中でこう記している。

一九二七年、蔣介石が革命に叛き、西山会議派が左派の国民党駐日総支部をメチャメチャにしてしまい、私は〝通緝〟のリストに入れられ帰国を余儀なくされた。[注41]

夏衍、浙江省杭県の人である。一九二〇年九月日本に留学、明治専門学校電気工学科に学んだ後、一九二六年九州帝大工学部第三部冶金工学科に入学した。[注42] 夏衍が日本留学時代に直接第三期創造社の人々と交渉があったかどうかは判然としない。だが、同時代を日本で過ごし後には彼らと関わりをもつ夏衍その人の動きは直接、間接に李初梨等の動きと関連する部分を含んでいるといえよう。

引用した夏衍の回想には若干の補足が必要である。会林・紹武編による「夏衍年表」によれば、夏衍は一九二四年一〇月、まだ明治専門学校在学中に日本で国民党に加入した。[注43] そして、さらに、同年表一九二五年の項には次のように記されている。

東京に行き、国民党左派の組織工作を行う。国民党中央海外部直属駐日総支部常務委員、組織部長に任命され、日本各地を奔走して革命を宣伝し、組織を発展させる。日本共産党と接触を始める。

つまり、夏衍がこの時帰国を余儀なくされる背景には、彼が当時国民党駐日総支部常務委員、組織部長であった事実に加え、当時の日本における国民党内部の「分化」乃至は「対立」が絡んでいるのである。

帰国した夏衍は五月の初めに上海に着いた。彼はそこで当時国民党中央委員・浙江第一師範学校校長をしていた経子淵を訪ねている。彼の回想によれば、この時夏衍もまた王学文と同じように武漢へと向うつもりだったという。[注44]

（四）

では、この時期、他の日本留学生はどうだったのであろうか。さらにこの時期の日本留学生の動向を、とりわけその「分化」が最も深刻であったろう日本における国民党組織に関わる部分でみていくことにしたい。

黄鼎臣、広東省海豊県の出身で、一九二一年に日本に留学、四・一二クーデター当時は日本医科大学の学生であっ

た。彼の回想「従中共東京特支到反帝大同盟」などによれば、大革命の時期日本の国民党組織は「青年会派」と「西巣鴨派」の大きく二つに分かれていたという。[注45]

「青年会派」とは、いうまでもなく、神田の中華基督教青年会を拠点とするグループで、左派系学生の集まりである。すでに引用した夏衍の回想にも「左派の国民党駐日総支部」とあるように、おそらく駐日総支部が何らかこの「青年会派」の核になっていたのであろう。

そして、さらにこの「青年会派」の中には「東京特支」のメンバーが入っていた。

「東京特支」とはすなわち中国共産党東京特別支部のことで中国共産党中央に直属し、全くの「秘密組織」であったという。彼の回想などを総合してみた限り、初期の党員として確認できたのは、鄭漢先、童長栄の二名である。また、この組織とすでに触れた在日中国共産主義青年団とがどのような関係にあったのかはいまだ判然としていない。ただ、王学文と同じ時に共青団に加入した廖体仁は一九二九年九月の時点で「東京特支」執行委員会の候補委員であったといわれている。[注46]

一方、「西巣鴨派」とは、東京西巣鴨を拠点とする右派系学生の集まりであった。この「西巣鴨派」については、一九二七年二月二八日に「栄」という署名で書かれた東京通信「反革命的右派和醒獅派在日本的活動」（〈中国青年〉第一五八期）に詳しい。[注47]それによれば、「西巣鴨派」とは右派、すなわち西山会議派であったというから、同派が結成されたのも一九二五年一一月の西山会議後のことであろう。「西巣鴨派」は左派党員であれば共産党だと日本側に密告するなどの行動に出て、結成後まもなくしてその活動は停滞したという。だが、「北伐」が開始されそれが進展するにともない、スローガンを「国民政府反対」から「国民政府擁護」に切り換えその勢いを盛り返し、後には国民党駐日総支部に対し「西巣鴨党部で全体が登記する」ようなメンバーは梁文周、陳訪先、葛暁東、劉文友などであったという。

だが、こうした「対立」もあくまで内部的なものに過ぎなかった。表面的にはまだ「国共合作」の名の下に、また「北伐」の進展、勝利を背景に緩い統一を保っていたのである。黄鼎臣も国民党内のこの二つの派について触れながら、その「対立」は安徽・広東などの各同郷会レベルに限られ、双方が公開で対立することはなかったと記している。しかしながら、この緩い統一も国民革命の挫折を背景

にしてある「分化」を迫られていくのである。

黄鼎臣はこう書いている。

一九二七年、蔣介石が〝四・一二〟反革命クーデターを起し大革命が挫折すると、日本の中国人留学生の間でも闘争が激化し、青年会派は分裂し始めた。だが、分かれて出ていった者はまだ少数で、青年会派は依然として一定の革命的な様相を保っていた。まもなく、〝七・一五〟の汪精衛の叛反、寧漢の合流によって勢い盛んであった大革命が徹底的に失敗してしまうと、青年会派もそれにつれて深刻な分裂が生じ、共産党と国民党左派の人々はすべて青年会派を離れ、残った者は西巣鴨派と合流した。(注48)

このように、黄鼎臣は、留学生間における「分化」が顕著になったのは〝四・一二〟クーデター直後よりも武漢政府の崩壊後であったという。当然といえばそれまでなのかも知れぬが、〝四・一二〟クーデターとは、それが勃発した当初、その本質を見極め、見定めていくにはまだ幾つかの中間項を必要としたのであろう。またいえば、そこで彼らがみせた「とまどい」や「動揺」とは、王学文・夏衍等が一様に武漢を目指していたように、むしろそれだけ彼ら日本留学生の間で国民革命にかける期待が大きかったことを示しているように思われる。

ところで、黄鼎臣は回想の中でさらにその「分化」について次のように記している。

私たちは青年会派を離れたが決して矛先をおさめたわけではなく、より精鋭なる隊伍を組織して、国民党右派と日本軍国主義に対し闘争を行った。一九二七年の八月か九月頃、東京特支の指導の下に、青年会派を離れた共産党員と国民党左派とは、左派よりの中間派の一部も加えて社会科学研究社を結成し、半地下の活動を行った。(注49)

そして、この「社会科学研究社」に、第三期創造社の馮乃超が参加していたのである。

黄鼎臣の回想によれば「社会科学研究社」の活動とは主としてマルクス・レーニンの著作を学習することであったという。そして、彼自身「当時日本語のマルクス・レーニンの著作が比較的たくさんあったので、私たちも少なからぬマルクス・レーニンの著書を読んだ」と記しているように、その学習は日本語の文献を通じて行なわれていた。学習方法は「独学を主として若干の討論」も行ないながら、ときに「批判と自己批判」を展開するかたちであったという。(注50)

「社会科学研究社」とは、こうした学習内容及び学習方

法、さらにはその名称からみておそらくは、日本の学生社研を下敷きに結成されたものであろう。既述したように、この「社会科学研究社」が結成された当時は、所謂「福本イズム」全盛のときであった。その意味で、「社会科学研究社」も、当時の日本の時代的な風潮を何らか反映したものであったに違いない。黄鼎臣の記す意味がどれほどのものかは知らぬが、彼は「批判と自己批判」を展開する「社会科学研究社」内には「革命的気分がとても濃厚であった」と語っている。

日本語の文献を通じてマルクス・レーニン主義を学ぼうとしていた「社会科学研究社」はそのため便宜的に甲組と乙組の二つに分かれていたという。甲組とは「日本語がよく出来、日本語でマルクス・レーニン主義の著作が読める」グループで、乙組とは「日本に着いたばかりで、日本語の出来ない」グループであった。馮乃超はこの甲組のメンバーの一人である。甲組には馮乃超の外、鄭漢先・童長栄・廖承志・黄鼎臣などの人々が参加していたという。(注51)

さて、この「社会科学研究社」について語る日本側の資料としては次のようなものがある。以下は、東京都立中央図書館実藤文庫でみた実藤恵秀『中国人日本留学史稿』内の氏自身の書き込みである。

その年（昭和二年―小谷）の八月、明治専門学校卒業の鄭漢先、一高生の童長栄等は房州館山に避暑中、密かに中華留日社会科学研究会を組織、同年九月、帰京後青年会で創立大会を開催し、漸次組織を拡大して各学校別に社会科学研究会を作り、各地（日本）に支部を増設し、一〇月には既に会員一五〇名を算するに至った。

また、昭和一三年に刊行された大久保弘一の『赤色支那』（東京・高山書院）「日本に於ける中国共産党の活動」の中には「『日本特支』の指導を受けてその外郭団体として活動したもの」(注52)として「社会科学研究会」を挙げ次のように記されている。

昭和二年一〇月ごろから鄭疇（帝大生）、陳其昌、黄利英、鄭漢先（以上何れも日大生）等が中心となり、社会科学研究を始め、三年四月ごろより党の積極的指導下において宣伝に没頭した。会員は五〇数名でうち党員は二七名。機関紙には『海外青年』、『五化』を発行。

いずれの記載もそれが何に依拠したものか判然しない。これらの記載を総合してみると、黄鼎臣のいう「東京特支」の指導の下に結成された「社会科学研究社」（これを日本側の資料はいずれも「社会科学研究会」という）とは、「東京特支」に属していた鄭漢先、童長栄の合議によって

結成のはこびとなったらしい。そして、この二名について
いえば、いずれもが夏衍と人的な繋がりをもっている。
夏衍を丹念に追われている阿部幸夫氏の御教示によれば、夏衍は明治専門学校で鄭漢先の一級上に当り、二人はかなり親しく往き来していたらしい。例えば、一九二六年に夏衍が九州帝大に出した入学願書の一項、「本人ニ於テ通信ヲ受クベキ場所」には「戸畑市明治専門学校鄭漢先気附」と書き込まれているのである。鄭漢先は、一九二七年三月に明治専門学校を卒業(注53)、彼が上京したのもおそらくその頃のことであろう。
童長栄は安徽省の出身、太陽社の成員で左連発起人の一人でもあった。だが、左連が結成されてまだ間もない一九三〇年四月に東北に派遣され抗日聯軍の工作に当り、一九三九年頃に死亡している。夏衍がその回想の標題を「一位被遺亡了的先行者」としたように、童長栄はこれまでほとんど省りみられなかった人物である。
童長栄と夏衍の出会いは、夏衍が国民党駐日総支部常務委員、組織部長を務めながら東京で日本の学生団体社会科学研究会に参加したときのことであった。夏衍は「一位被遺亡了的先行者」の中でこう書いている。
私が長栄同志を知ったのは一九二五年のことである。私たちは、日本、東京の進歩的な学生組織社会科学研究会に参加して偶然知り合い、以来大変仲のいい友人になった(注54)。
馮乃超が「社会科学研究社」に参加したのもおそらく彼が東京で「大学内の社会科学研究会」に関わっていたことと何らか関連していよう。そしてまたいえば、馮乃超自身、「青年会派」の「分化」をかなり身近な「日本体験」としてもっていたように思われる。
馮乃超、黄鼎臣は既に述べたようにともに広東省の出身である。そして、黄鼎臣の回想によれば、広東省同郷会は安徽省同郷会と並んで、「青年会派」と「西巣鴨派」が緩い統一を保っていた時代から、常に両者の「対立」が最も激烈なところであったという。それに加えて、また馮乃超はその「対立」乃至は「分化」が進行していた際に青年会内に居住していた可能性がある。一九二四年一月四日に執筆された同じ創造社同人穆木天の「譚詩」によれば、馮乃超は少くとも一九二六年一月の時点では青年会の「七号室」に住んでいたのである(注55)。

(五)

ところで、東京で大革命の挫折を背景にこうした「分化」が進行していた同じ頃、李初梨等は京都で如何なる動きを

示していたのであろうか。この点はいまだ確定的な資料が乏しいのだが、おそらく、京都においてもある「分化」が進行していたことは事実であろう。

馮乃超の回想「魯迅与創造社」によれば、馮乃超は一九二七年の夏休みの前、京都に李初梨を訪ねたという。そして、この時、馮乃超は李初梨に誘われて京都帝大講堂で開かれた「日本と中国の学生が出席している大会」に参加した。「大会」の性格は不明なのだが、その席上、李初梨は日本語で講演を行い、その最後を「青天白日旗の紅い旗印は、中国無産階級の血によって一層鮮やかに染められようとしている」としめくくったという。馮乃超はその印象が強烈で「これは、国民党左派が中国労農革命者に転じた思想の現われであり、この言葉は五一年を経た今でもはっきりと印象に残っている」と記している。(注56)

一方、中国国内では大革命が挫折し、「清党」が開始されると、難を逃れて進歩的な作家たちが続々と上海に集まってきていた。そして、同じ頃創造社出版部上海総部では、所謂「創造社の紊乱」(注57)に一つの端を発する「創造社の改変」をめぐって、郁達夫・成仿吾・鄭伯奇等の間で話し合いがなされていた。まもなく、郁達夫がこれに起因して創造社を離脱。鄭伯奇の回想によれば、成仿吾が日本へ向ったのはこの後のことであるという。

成仿吾は手薄になった創造社を思い、鄭伯奇から李初梨等の話を聞くと「大変喜んだ」という。そして、自ら「新手の軍隊」として彼らを迎え入れるべく日本に向ったのである。その時期は、郁達夫が創造社離脱の「啓事」を出した後、おそらくは、一九二七年の八月下旬から九月初めにかけてのことであろう。(注58)つまり、それは、既述した「社会科学研究社」が発足し、その活動を始めたのとほぼ同じ時期だったのである。

本来なら、そうした動き等々についても触れていかなければいけないのだろう。それは、いうまでもなく、これらの事柄がその後の「革命文学論戦」、ひいては「三十年代文学」により直接に関わってくる問題だからである。だが、与えられた紙数を越えたいま、これらの事柄についてはまた後日を期すほかはない。ここでは、これまでみてきたいくつかの事柄に関わって、なお残された二、三の問題を指摘しておくことで、とりあえずのむすびとしたい。

まず、李初梨等第三期創造社の同人についてであるが、彼らの「日本体験」を考えてみた場合、当時の日本の学生運動、とりわけ学生社研との関係が改めて問題になろうか

と思われる。それは、彼らが「福本イズム」を学生社研との繋がりの中で受容していった可能性が強いということを含め、「学連事件」や、当時の日本の学生の中にあったある種の雰囲気、例えば「新カント主義」から「マルクス主義」へという風潮などが彼らの思想形成にどう関わっていただろうかという問題である。

また、在日国民党の組織乃至運動等もそれと関連して問題になるであろう。つまり、それは中国国内の運動や思想分化が日本の留学生運動に何らか反映したものであり、それが彼らの身近かなものとしてあった以上、そうした当時の中国国内の運動や論争などが日本の留学生の動きにどう反映し、さらに、それが彼らひとりひとりの思想形成にどう繋がっていったのかを具体的に見ていくことも、今後に残された必要な課題の一つであろう。

また、「社会科学研究社」についてであるが、「社会科学研究社」は、すでに述べてきたことからもわかるように、国民革命挫折の後日本留学生によって組織された最初の団体であり、その後の日本留学生の運動における一つの核になっていったと考えられる。具体的にいえば、「社会科学研究社」は、のちに社会科学研究会の日本分会となり、その存続も一九三二年頃まで確認できる。(注59) そして、この組織は司徒慧敏等東京美専の学生を中心に組織されていた「東京美術研究会」の後身「左翼芸術家連盟」(注60)、また、近藤龍哉氏が「胡風研究ノート」(注61)の中で指摘、言及されている「新興文化研究会」などとある関連をもっていたと考えられる。

そればかりではない。「社会科学研究社」はその後の日本と中国国内の運動とを繋ぐ細い糸でもある。例えば、「社会科学研究社」は、一九二八年五月済南事変を機に日本で反日大同盟を結成し、さらに社員の関健を帰国させ、反日大同盟上海分会、のちの反帝大同盟を組織した。そしてそこには、第三期創造社の〈文化批判〉の後身である思想社をはじめ上海芸大など七つの単位が結集していたのである。(注62)

またこれとも関わって人的繋がりの中にも興味深い問題がある。具体的にいうと「東京特支」の鄭漢先、童長栄は帰国すると閘北区委に入り、入党した夏衍は閘北区委の第三街道支部に入る。そして、同じ閘北第三街道支部には童長栄と同郷である銭杏邨、蔣光慈など太陽社のメンバーが所属していたのである。(注63) こうなると、もはや単なる偶然というだけではすますことのできない何かを感じる。それは、夏衍が左連結成に向けて動くその動きとどう関わりが

あったのか、あるいはまた「閘北区委」と「東京特支」の関係はどうであったのかなどいくつかの問題と関わっている事柄だからである。

以上、四・一二クーデター前後の、日本に留学中だった第三期創造社同人たちの動向を追って来る中で明らかになったことは、それが、当時の日本の学生運動の情況や中国人留学生全体の動きと分ちがたい関わりを持っていたことである。とりわけ、そこで浮び上って来たことは国民革命の挫折を背景とする「社会科学研究社」をめぐる動きが、その後の「三十年代」における中国人留学生運動とそれを通じての日中の文学的交流の端緒として位置づけられるであろうこと、さらには、それが人的な繋がりを含めて、より直接的に中国「三十年代文芸」に関わる側面を持つものであろうということである。上にことわったようになお明らかに出来なかった問題も多いが、ひとまずはこのことを指摘して本稿の結びとしたい。

（注1）丸山昇『魯迅』（平凡社　昭和四四年）P二一七～二一九

（注2）丸山昇『魯迅と革命文学』（紀伊国屋新書　一九七二年一月）P九五～九八

（注3）拙稿「創造社年表」（伊藤虎丸編『創造社研究』所収、アジア出版　一九七九年）の「補注(5)第三期創造社の人々と京都帝国大学文学部」を御参照いただきたい。

（注4）鄭廷順「鄭伯奇伝略」（徐州師範学院編『中国現代作家伝略(上)』所収　四川人民出版社　一九八一年）

（注5）『第一高等学校一覧』、『第三高等学校一覧』、『京都帝国大学一覧—自大正一一年至大正一二年—』

（注6）京都文学会発行〈芸文〉（第一六年第五号　大正一四年五月）

（注7）『京都帝国大学一覧—自大正一三年至大正一四年—』

（注8）鈴木安蔵「学連事件—精神史的回想(1)」（〈現代と思想〉No. 35　一九七九年三月）鈴木氏は李初梨等と同級で一九二四年に京都帝大文学部哲学科に入学し、のち「学連事件」に連坐して退学した。

（注9）楊騒「最初和外国文学接触是在日本」（鄭振鐸、傅東華編『我与文学』所収　生活書店　一九三四年）、『東京高等工業学校一覧』・『第五高等学校一覧』。李初梨は、別に「李祚利」とも記す。

（注10）馮乃超「東京帝国大学文学部在学証書」（『創造社研究』（前出）に収録）

（注11）鄭伯奇「創造社後期的革命文学活動」（『中国現代文芸資料叢刊・第二輯』所収　上海文芸出版社　一九六二年）彭康は、字は子劼（馮乃超「魯迅与創造社」）。

（注12）注(11)に同じ。

（注13）創造社と少年中国学会との関係については、拙稿「創造社と少年中国学会・新人会」（〈中国文化・漢文学会会報三

八号〉）を御参照いただきたい。

（注14）〈京都帝国大学新聞〉（大正一四年四月一五日）これによれば、彼は三高の出身。

（注15）李書城「関于李漢俊」（〈革命史資料〉二　一九八一年）

（注16）馮乃超「魯迅与創造社」（〈新文学史料〉一　一九七八年）・張資平「読〝創造社〟」（黄人影編『創造社論』所収光華書局　一九三二年）

（注17）張資平「読〝創造社〟」（前出）

（注18）注（15）に同じ。なお、彼の祖父は李鳳亭。田漢の友人で、一九二一年泰東書局に成仿吾を招いた人である。（『創造十年』）

（注19）『京都帝国大学一覧―自大正一四年至大正一五年―』

（注20）注（10）に同じ。

（注21）注（14）に同じ。

（注22）馮乃超「魯迅与創造社」（前出）

（注23）『第八高等学校一覧―自大正一三年至大正一四年―』朱鏡我は文科乙類、馮乃超は理科甲類の卒業。

（注24）注（19）に同じ。

（注25）王学文「河上肇先生に師事して」（〈人民中国〉一九八一年一〇月号）

（注26）同上。なお、この時彼はすでに結婚し、二人の子供がいた。吉田山近くの極楽寺という寺に住む。

（注27）おそらく、この人的な線は、残る傅克興、沈起予、許幸之、沈葉沉にも繋がるのであろう。沈起予は、一九二七年四月、京都帝大文学部哲学科に入学している。沈葉沉（＝沈学誠・沈西岑）は、一九二五年四月に東京美術学校に入学した。また、沈起予・許幸之・沈葉沉は、司徒慧敏が加入していたという「社会科学研究社」の外郭団体、「芸術連盟」（先の東京美術研究会）の会員である。

（注28）清水平九郎「『日本の革命歌』解説」、鈴木安蔵「学連事件」（前出）より重引。清水氏は「学連事件」当時、明治学院生、「学連」が「一大躍進」をとげた第二回全国大会の「学連歌」を作った。

（注29）菊川忠雄『学生社会運動史』「第三章・第二回全国大会の諸問題」（海口書店　昭和二二年）

（注30）注（25）に同じ。

（注31）淡徳三郎は、この時大学院生。当時、哲学科心理学専攻の同級生は三名だけで、淡徳三郎と鄭伯奇は友人である。

（注32）注（29）に同じ。

（注33）注（11）に同じ。

（注34）注（4）に同じ。

（注35）注（11）に同じ。この頃京都にいたのは、李初梨・彭康・李鉄声・沈起予・王学文などである。朱鏡我はこの年の三月、東京帝大を卒業したばかりである。また同内容の資料としては鄭伯奇「略談創造社的文学活動」（〈文芸報〉一九五九年八期）がある。

（注36）注（22）に同じ。

（注37）王学文「関于左連成立経過的補正」（〈人民日報〉一九八

○年三月）

（注38）注(25)に同じ。なお、王学文は武漢滞在中に太平洋労働者会議に出席、日本代表の山本懸蔵等と会った。また、彼はこの時の資料を大田遼一郎に送っている。

（注39）注(23)に同じ。八高理科甲の同級生にはこの外、「〈創造週報〉復活預告」の特約選述人の一人、李白華がいる。

（注40）注(7)に同じ。

（注41）夏衍「憶阿英同志」（『作家的懐念』所収　四川人民出版社　一九七九年）

（注42）夏衍「九州帝国大学入学願書」。「憶阿英同志」（前出）によれば、彼が九州帝大に入ったのは官費を得るための方便であったという。

（注43）会林・紹武編「夏衍年表」（〈戯劇芸術論叢〉二　一九八〇年）。同年表には、「一〇月、孫中山在中国共産党的支持下、応北方軍閥政府邀請、離粵北上、途経門司。和数名中国留学生代表往見、孫中山当場指定李烈鈞介紹加入中国国民党」と記されている。

（注44）復旦大学《魯迅日記》注釈組「与夏衍同志的両次談話記録」（〈魯迅研究資料〉五　一九八〇年五月）。経子淵は「社会科学研究社」甲組にいた廖承志の岳父。

（注45）黄鼎臣「従中共東京特支到反帝大同盟」（〈革命史資料〉一　一九八〇年）。この外、彼の回想に「日本医大遊学記」（〈人民中国〉一九八一年八月号）がある。

（注46）大久保弘一『赤色支那』（東京・高山書院　昭和一三年）。なお、同書は「中国共産党日本特別支部」は、「社会科学研究会」内の左翼分子によって、一九二八年の八月末に大岡山の某所で結成されたとする。しかしながら、黄鼎臣の回想に従えば、「東京特支」はそれより以前からあったと考えられる。

（注47）「醒獅派」とは一九二五、六年頃隆盛を極めていた国家主義の団体。この醒獅派に代表される国家主義と〈中国青年〉とは一九二四年頃から論戦を行っており、一九二六年頃は第二期創造社も参加した。こうした、中国国内の情況が留学生間にどう反映し、またそれが李初梨等の思想形成とどう関わっていたかなど、これらは改めて問題となる事柄であろう。

（注48・注49・注50・注51）注(45)に同じ。

（注52）同書が挙げる「社会科学研究社」以外の「東京特支」の外郭団体とは、「芸術連盟」・「時代工程社」・「人社」・「中華留日反帝同盟」の四団体である。

（注53）「明治専門学校卒業生一覧」

（注54）夏衍「一位被遺忘了的先行者」（〈人民日報〉一九八〇年四月一八日）

（注55）穆木天「譚詩」（〈創造月刊〉第一巻第一期　一九二六年三月一六日）

（注56）注(22)に同じ。

（注57）「創造社の紊乱」をめぐる事情については、拙稿「創造社年表」（前出）の「補注(7)所謂〝創造社の紊乱〟前後」

を御参照いただきたい。

（注58）　注（11）に同じ。

（注59）　注（46）に同じ。

（注60）　司徒慧敏「五人の学友たち」（〈人民中国〉）

（注61）　近藤龍哉「胡風研究ノート」（〈東洋文化研究所紀要〉第七五冊　昭和五三年）

（注62）　注（45）に同じ。

（注63）　黄鼎臣「従中共東京特支到反帝大同盟」（前出）、夏衍「一位被遺忘了的先行者」（前出）